26PB-am298

3 年間の実務実習事前実習における学生の自信度の評価

○渡辺 茂和[1], 村上 勲[1], 渡部 多真紀[1], 中村 英里[1], 齋藤 百枝美[1], 鈴木 義彦[1], 土屋 雅勇[1]（[1]帝京大）

【目的】帝京大学薬学部では実務実習事前学習（以下、実習と略す）として、4 年生前期より、外部講師とともに調剤実習を行っている。今後はさらに限られた時間の中で学生のモチベーションを高め、改訂モデル・コアカリキュラムを意識した効果的な実習を行うことが必要である。今回は、実習の学習効果を評価する指標として行ってきた学生の自信度調査の過去 3 年間の結果について検討を行った。【方法】2013～2015 年度前期に実習を行った薬学部 4 年生に対し、計量調剤（散剤）」（以下、散剤と略す）、「計量調剤（水剤）」（以下、水剤と略す）、「調剤薬鑑査」（以下鑑査と略す）、「疑義照会」について各々実習前・後で各課題の「自信度」について 10 段階評価でアンケート調査を実施した。【結果】各年度における自信度では、各課題において 2015 年度で低い傾向は認められたが、その他はほぼ同様の傾向を示し、実習前・後の分布変化も同じ傾向が認められた。全年度で各課題において実習後に「自信度」の有意な上昇が認められた。各課題間の「自信度」に関して、実習前は散剤＞水剤＞鑑査＞疑義照会の順であり、実習後も同様の順であった。実習前・後の「自信度」の増加は、散剤＞水剤＞鑑査＞疑義照会の順であった。【考察】疑義照会、次いで鑑査では実習前の「自信度」が低く、伸びも少なかった。要因としては、アンケートの「フリーコメント」から疑義照会は疑義点の抽出と電話での対応に自信が持てないことが一因と思われた。これに対し散剤や水剤は器具等を使用するため、作業の具体的なイメージが構築しやすいのではないかと思われる。鑑査や疑義照会では、作業工程の具体的な行動のイメージが構築しにくいと考えられることから、このような課題では、知識や作業の具体的なイメージが掴めるような実習内容の工夫が必要と考えられた。